



北海道医療大学

心理科学部 臨床心理学科

近藤清美 (こんどう きよみ)

所在地：札幌市北区あいの里 2 条 5 丁目

<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/>

Profile — 近藤清美
北海道医療大学心理科学部教授／臨床心理学科長。専門は発達心理学、臨床心理学。著訳書は『自閉症の子どもたち：間主観性の発達心理学からのアプローチ』（共訳、ミネルヴァ書房）など。



北海道医療大学の特徴

『心理学ワールド』の読者の皆さんは、「北海道医療大学」と見て、「日本心理学会第 77 回大会」を思い浮かべたのではないのでしょうか。そうです。今年の日本心理学会大会は、本学を主催校に、坂野雄二先生を大会長として、9 月 19 日から 21 日まで、札幌市内、札幌コンベンションセンターで開催されるのです。

そこで、大会長の坂野先生を廊下で呼び止めて、「今大会の特徴は？」とおききました。

1. 従来のワークショップをやめてシンポジウムだけにして、実質的な討論の場を充実させた。
2. チュートリアル・ワークショップを多彩に設けて、参加者が研究技法や介入技法を学ぶ機会とした。
3. 坂野が大会長である。

3 点目を挙げる時、坂野先生はニヤリと笑い、「冗談や」と。

いきなり、宣伝？ いえいえ、坂野先生が挙げたこの 3 点、まさに、北海道医療大学の校風を示すので取り上げたのです。つまり、過去のしがらみにとらわれずに実質を重んじ、現代社会のニーズに合わせて、実際に役に立つ知識・技法を身につけるといいます。3 点目の「坂野先生」の部分は、後で説明しますが、これも重要な特徴です。

本学は、「新医療人育成の北の拠点」として、歯学部、薬学部、看護福祉学部、心理科学部、そし

て今年度開設されたりハビリテーション科学部の 5 学部 8 学科からなる、医療の専門職業人を育成する医療系総合大学です。医療での国家資格、12 種類の取得を目指すだけでなく、チーム医療に必要とされるコミュニケーション能力や確かな実践力を身につけることのできる大学です。

臨床心理学科での教育

心理学には、未だ国家資格がなく、医療人の中での位置づけが曖昧という問題がありますが、本学科の教育が他の学部とかけ離れているわけではありません。

それを説明するには、坂野先生の言う 3 点目が重要となります。それは、坂野先生が本学科の「看板教授」だという意味ではありません。坂野先生の専門である認知行動療法の目指す、「証拠に基づく臨床心理学」を臨床心理学教育の柱におくことが、本学科の特徴だからです。

「証拠に基づく」というのは医療においては当然のことです（効き目の不確かな薬を処方されたら怒るでしょう）。それは、科学的な知見に基づいて臨床的介入を行うということです。基礎研究と臨床との結びつきが当然であり、それに携わる人材は、科学者実践家モデルによって養成されます。つまり、科学的知見を読み解き、それに基づいて実践を行い、実践結果を科学的に実証できる実践家を養成することです。学部教育において

は、そうした実践家を直ちに養成するわけではありませんが、基礎心理学と臨床心理学、研究と実践のつながりを意識して教育を行っています。

具体的に、本学科の心理学教育では、科学者の部分を重視して、心理学研究法を 3 期にわたって学習します。その一方で、実践面ではアセスメント技法やいくつかの心理療法を演習で学び、臨地実習として現場に出て体験的に学びます。また、解剖学などの医科学を含む身体科学と“心”を対応させながら学ぶことも、医療系大学ならではの特徴です。



写真 1 坂野先生と活発に討論する学生たち

心理学の大学ですから、卒業時には「認定心理士」資格を取得できます。さらに、日本産業カウンセラー協会とタイアップした専用講習を受講することで、産業カウンセラー資格を在学中に受験できることは、他の大学にはない本学独自の取り組みです。

本学臨床心理学科の卒業生の約 3 割は進学し、その多くは、臨床心理士資格を目指します。約 2 割は福祉施設の指導員として働きます。それ以外は、公務員や一般

企業に就職します。

大学院臨床心理学専攻の教育

科学者実践家モデルによる教育が実質的に展開されるのは、大学院においてです。

本学大学院心理科学研究科臨床心理学専攻は、平成19年度から21年度に、「科学者実践家モデルに基づく臨床心理学教育」というテーマで文部科学省の「組織的な大学院教育改革推進プログラム(GP)」に採択され、A判定の評価をいただきました。現在のカリキュラムはこの成果を継承しています。

特に、本学大学院の特徴として、医療教育では標準的に行われているOSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）を取り入れたことが挙げられます。OSCEでは、模擬患者を俳優に演じてもらい、心理面接やアセスメントを適切に進める能力を評価します。OSCEで能力が確認されて初めて、本学の心理臨床・発達支援センターで実際にクライアントさんに関わる実習に入ることができます。心理臨床・発達支援センターでは、年間、のべ1000名を超えるクライアントさんがいらして、大学院生は教員のスーパーバイズのもと、実践的経験を積むことができます。

こうした実践家としての教育とともに、大学院生には研究が課せられ修士論文として成果を発表します。本学の大学院生は、国内外での学会発表や論文投稿も盛んで、学会賞を取得する大学院生も多数を数えます。

本学は、臨床心理士資格認定協会第一種校であるので、修了とともに臨床心理士の受験資格を得ることができ、修了生のほとんどがこの資格を取得します。また、病院や発達支援の施設で、常勤の心理士として就職しています。毎年、数名、

大学院博士後期課程に進学し、大学等の研究職の道に進む者もいます。

心理学の教員スタッフ

本学科の心理学の教員スタッフは、多彩です。

坂野先生を代表とする認知行動療法を得意とする教員が多いのは確かです。しかし、分野は実に様々です。坂野先生（教授）は、うつ・不安障害といった精神科領域の専門家です。同じ医療でも、宮崎友香先生（講師）は、メンエール病、がんなど難病患者への心理的支援に携わっています。富家直明先生（教授）は学校領域、森伸幸先生（准教授）は矯正領域をそれぞれ専門としています。

さらに、子ども臨床に関わる教員スタッフも多く、堀内ゆかり先生（教授）のプレイセラピーを初めとして、今井常晶先生（講師）の音楽療法があり、近藤も発達支援に携わっています。金澤潤一郎先生（助教）は、認知行動療法から成人の発達障害の問題に取り組んでいます。

さらに、カウンセリング担当は、解決志向アプローチの専門家である河合祐子先生（准教授）です。そして、臨床心理学教育では異常心理学・精神医学は不可欠で、それを学部長の中野倫仁先生（教授）が押さえています。

教員スタッフの多彩さは、臨床の教員だけでなく、基礎心理学の教員も同じです。順に挙げていきますと、学習心理学の漆原宏次先生（准教授）、認知心理学の齊藤恵一先生（講師）、発達心理学の中野茂先生（教授）、生理心理学の百々尚美先生（講師）、社会心理学の土肥聡明先生（教科担当教授）と、心理学の主要な分野は全部そろっています。

さらなる特徴は、多くの教員が「二足のわらじ」を履いていることです。『心理学ワールド』前号

の小特集「2つの顔を持つ心理学者」では近藤が寄稿しましたが、臨床と研究の二足のわらじを履くことは、本学の心理学の教員では珍しくありません。科学者実践家モデルを標榜しているのですから当然といえば当然です。



写真2 臨床心理学科の教員たち
学生のキャンパスライフ

本学科のキャンパスは、札幌市内の北の端、石狩川の近くにあり、北海道開拓時代のこの土地は、泥炭地帯で環境も厳しく、「北の果て」と揶揄されたそうですが、いやいや、札幌駅から電車で21分で到着する、とても便利な所なのです。隣に大学付属病院があり、病気の時は安心です。しかも、学生には「東日本学園後援会」から医療費の補助が出て自己負担がありません。さすがに、医療大学なのです。

本学の中で心理科学部だけが札幌市内にキャンパスがあり、他の学部がある当別キャンパスとは、電車やバスでつながっていて、学生はサークル活動など一緒に楽しんでいます。

北海道で学生生活をする何よりの楽しみは、食べ物がおいしいこと。魚介類はもちろん、野菜も果物も豊富です。そして、夏は涼しく、冬も暖房のきいた建物で寒さ知らず。ゴキブリが出ないというのもポイントです。かつ、物価も本当に安い。教育の充実はもちろんですが、生活面も快適なのが、本学でのキャンパスライフの特徴です。こんなお得な大学はありません。おやおや、最初が宣伝なら、最後も宣伝になってしまいました。